

令和3年 6月

■一般文学

「春夏秋冬 しあわせを呼ぶ生き方」

・著:吉沢 久子

・出版社:海竜社

古い物を大切に使い続ける。九十過ぎておいしいステーキをいただく。何でも食べられるしあわせはかけがえなく大きい。戦争経験の後遺症で土があればわずかなスペースがあると野菜や食べ物を作ってしまう。季節が持ってきてくれる自然の豊かさ大きさ、ときにはほしくないものも自然は持ってくるけれど、それが次の季節の喜びをつくってくれるものでもある。

九十過ぎた著者は、毎日の生活で感じた事を温かみある言葉で表現されています。普段の日常のちょっとしたすきま時間に読むとほっとする本です。九十過ぎてこんな暮らし方をしたい。そんな生き方、老い方のヒントがいっぱいです。

(対象 一般)

■一般書

「日本人のしきたりいろは図鑑」

・著:トキオ・ナレッジ

・出版社:宝島社

日本には昔から数多くの「しきたり」があります。

毎年繰り返し行っている「しきたり」ですが、改めて詳しく問われると、意外と知らない「しきたり」が多いでしょう。「しきたり」には、その一つ一つに意味があり、由来があり、マナーがあります。

「初詣には神社とお寺どちらに行けばいいの?」、「お花見の由来は?」、「風呂敷の包み方」など、季節/衣食住/冠婚葬祭の3章構成で紹介されています。

日本人としての大切な文化や慣習を思い出しながら確認してみませんか。

(対象 一般)

■児童書

「雨やどりはすべり台の下で」

・著:岡田 淳

・出版社:偕成社

あるアパートに住む10人の子どもたちが、公園で三角ベースをしています。

そこへ、同じアパートに住む雨森さんが公園を横切ると、当然雨が降り出し、子どもたちはすべり台下のトンネルの中で雨宿りをすることに。

トンネルの中で、小学6年生の一郎が「この雨、雨森さんがふらせたんだ。そうさ。あのひと、やっぱり魔法つかいなんだよ。」と言いだします。無口で人付き合いもない雨森さん。みんなは雨森さんのことを全く知りません。そこで、子どもたちは一人ずつ雨森さんとのエピソードを語りだします。夢なのか現実なのかよくわからない雨森さんとの優しい思い出。雨が上がるころには雨森さんがどんな人なのか何となくわかったような気がします。

(対象 小学中学年から)

■絵本

「海のなかをはした日」

・さく:チョン・シューフェン

・やく:中 由美子

・出版社:童心社

おんなのこは、おとうさんとおかあさんといっしょに車でおうちへ帰るところ。ところが、まさかの車のじゅ

うたいにまきこまれてしまいます。おとうさんとおかあさんは、ちゃんとうちへ帰られるか心配でおおあわて。

そんなとき、「あれ？」おんなのこが外をながめていると、車の窓のそとをちっちゃなさかながおよいでる！くるまでいっぱい道路は、いつのまにか幻想的なうみのそこになっていたのです。

おおきなクジラのおまわりさんは、ゆうゆうと泳いでいるし、しんじゅは、まるでくびかざりみたいにきらきらきれい。

車がじゅうたいしたらとってもたいへんだけど、こんなすてきな海のなかをドライブできたら楽しいですね。淡い色彩とタッチが優しい絵本です。

（対象 幼児から）